
カンピオーネ！～錬鉄の神殺し～

ペキンダッ君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンピオーネー〜錬鉄の神殺し〜

【Nコード】

N9854R

【作者名】

ペキングダツ君

【あらすじ】

理想を追い続け、世界を追われた『錬鉄の魔術使い』は、新しい世界へと渡った。

渡った世界には『魔王』と呼ばれる特殊な存在がいて、自身もその存在であることに気づく。

その数奇な運命が原因か、彼は次第に巻き込まれていく。

・・・『錬鉄の神殺し』の新たな闘いの幕が上がる。

問題点を順次修正中

Prologue (前書き)

暇人が暇を持て余して、書いてしまったものです。

つい、自らの黒歴史ノートを開いてしまつぐらい…

そんな愚か者の暇つぶしをどうか暖かい目で見守ってあげてください。

Prologue

世界に、7番目の新たなカンピオーネの誕生という情報が駆け巡っている頃

ある会議室の机の上、草薙護堂についての分厚いレポートの隣に、数枚のメモ書きに近いレポートがひっそりと置かれていた…

そう、まるで、何かの始まりを示す狼煙のように…

【二十一世紀初頭、正式に確認されていないカンピオーネについての報告書より抜粋】

魔術師たちの間で噂になっている謎のカンピオーネについてですが、この噂の真偽は至って不明でした。

四年前にウオバン侯爵のジークフリート招聘の儀式の際、姿を現してから今日まで、その姿をはっきりと見た者はいないことも大きな要因でしょう。

只、このカンピオーネと思われる目撃情報が、中東地域など紛争地域で度々報告されており、総合的に判断し、このカンピオーネの存

在する可能性が高いと判断します。

このカンピオーネがどんな人物なのかわかっていませんが、その戦闘スタイルなどから、元々は魔術師だったのではないかと推測されます。

また、少ない目撃情報から推測すると、古今東西の数多くの魔剣を所持、操る事から、かなり高位な騎士である可能性も考えられます。しかし、彼が持っている魔剣は我々の知る、どの魔剣とも異なります。

今までに確認されているのは、岩からくり貫いたような斧剣、白と黒の中華剣、十字架のような細い剣、紅い魔槍などです。

何処にあれだけの魔剣を貯蔵しているのかは不明ですが、もしかしたら、それが彼のカンピオーネの権能なのかもしれません。しかし、どんな神を殺害し、得た権能なのかは依然わかっていません。

もし、そのような権能を得ているのだとしたら、一体どんな神を……

【グリニッジの賢人議会により作成された、正体不明の王についての調査書より抜粋】

彼の王が最初に確認されたのは今から四年前とされており、今回再び公の場に姿を現した。

先日あったという、「剣の王」サルバトーレ・ドニと、新たな王となった草薙護堂との決闘に仲裁しに現れ、その後姿をくまましたという報告を受けた。

これは後に、2人の王にも確認したことなので、間違いないと考えられる

さて、この王についてだが、わかっていることは非常に少なく、残念ながら顔や氏名については謎のままであり、容姿や声から若い男性であると推定される。

また、2人の王達から話を聞くと、何らかの礼装と思われる紅い外套とフードを被っていたとのことで、これは他の報告とも一致し、今後の判断材料となりそうだ。

しかし、果たしてこの王が本物なのか疑う方もいるかもしれないが、王達の決闘を止めることができるのは、やはり同じ存在でなくては不可能だろう。

彼もまた、か弱き人の子に過ぎない我ら魔術師を凌駕する魔王の1人なのだ。

そして、謎多き彼の王の中でも、一番不可解なことがある。果たして、いつ神殺しを達成したのかということだ。

ここ数年間に確認された、まつろわぬ神達はいずれも倒されている。それ故に、この王がどんな神を殺害したのかが一切わからない。

仮に、まつろわぬ神が降臨した場所に居わせていたとしても、何かしらの影響が周囲に出ている筈だが……

- - それは、届かないとわかっていながらも愚直に理想を目指し、
世界を追われた1人の『愚者』の物語 - -

- - 理想を追い続けた、紅い『錬鉄の神殺し』の新たな闘いの幕
が上がる - -

Prologue (後書き)

やっぱり、そんなにうまく書けないものですね。

感想等々ありましたら、よろしくお願いします。

…何してんだろ、俺。

Interlude 1 (前書き)

一時のテンションで書いたものを、後日改めて読むと、悶え狂いそうになるのは私だけだろうか…

駄文ですが、読んで頂けると嬉しいです。

Interlude 1

【二十世紀初頭 4月初旬 北アフリカ某国 17:06】

「ハア、ハア、ハア」

一人の少女が走っていた。

14歳ぐらいの少女だろうか

子供の面影を残した顔には、汗なのか髪がくっついていて

鬱蒼と茂る木々の間を、何かから離れるように一生懸命に逃げた。

9

(村から、あいつらを引き離さないと。少しでも、逃げなきゃ。捕まるわけには…、いけない！)

彼女がそれを見つけたのは偶然だった。

いつものように森に入ったのだが、そこで武装をした男たちのグループと遭遇すると思っていなかった。

慌て隠れると、男達の大きな笑い声が聞こえてくる。

盗み聞きになってしまったが、少女は聞いていて、戦慄した。

…どうやら、自分の村を襲う計画を話あってるようだった。

(あいつらを、絶対に、村に近づけてはいけない。ああ、今日は本当についてないっ)

村の危機を村人達に伝えようと、見つからない内に逃げようとしたのは良かった。

しかし、人間そういう時にこそ、ドジを踏みやすかったりする。

この時も足元を注意しとけば、小枝を踏み折ることもなかったのに…

男達には、案の定気づかれてしまい、一目散に逃げるしかなかった。

どれぐらい逃げたのだろうか。

少女がどんなに身軽であろうと、向こうは大人。

しかも、男ばかり。

体力の差が出て、徐々に距離は詰められていた。

後ろから追ってくる男達に気を取られ過ぎていたせいだろう。

足元の木の根に気づかず、思いっきり躓いてしまった。

(マズいっ)

慌て立ち上がろうとしたが、既に5、6人の男達に追いつかれてしまっていた。

「よう、嬢ちゃん。楽しい鬼ごっこは終わりかい？」

「せっかく、ここまで逃げてきたのにねえ〜。残念だったねえ〜。」

「オイ、この娘、今から行く村の奴じゃねえの？」

「ああ、多分そうだろ。『商品』さ。」

男達は『狩り』が終わったことを確信しているのか、少女をそっちのけで話を始めた。

「どうせ、その『商品』も傷物になるんだ。だったら、早かるが、遅かるうが変わらないんじゃないかね？」

「おつ、売り払っちゃおう前にヤっちゃおう?」

「それもそれでいつか。」

そう話を終えると、男達は下卑た笑みを浮かべながら、少女に近づいていく。

(い、嫌だ…、誰か…、誰でもいいから、助けて…！)

恐怖に目を閉じて、少女は願うしかなかった。

しかし、そんな少女の願いも届くことはない。

わかりきったことだ。

この場には、少女と男達を除いて、誰もいない。

だから、そんなことを願っても無駄なことだった。

そう、無駄な筈……だった。

「ぶむ。どつやら間に合ったようだ。」

その声を聞くまでは。

「えっ……」

少女の口から声が漏れる。

目の前には、紅い外套を着た青年が少女を守るように立っていた。

その紅い大きな背中を見ていると、不思議と恐怖が薄れていくのを感じた。

男達は、さっきまで姿形も見えなかった第三者が急に現れたことに動揺していたが、やっと状況を把握したのか、リーダーらしき男が聞いてきた。

「お前、こんなところに何だよ？」

死にたくねえなら、早く失せな、坊主。」

青年の顔はフードでよく分からないが、笑っているのだろう。
皮肉めいた口調で

「なに、偶然見掛けてしまったものでね。
少女1人が、数人の男達に追われているなんて、おかしいと思って
来たのだよ。」

まして、全員が銃を持っているなら、尚更だ。
この娘の身に、何かあったと考えるのが、普通だろう?。」

紅い青年は「それに、」と続けて

「助けを求めている人が、目の前にいるんだ。
それを、見過ごせる訳がない。」

何より、私の主義に反するのでね。
悪いとも思わないが、君たちを倒させて貰おう。」

そんなに青年の言った事がおかしかったのか、男達は笑い出した。
そんな中、男達の1人が前に出てくる。

「なあ、その兄ちゃん。
こんな時に『正義の味方』ごっこ、ってかあ?
今時さあ、そんなの流行らねえんだよお!。」

そう叫ぶなり、持っていたマシンガンを青年に向かって撃とうとし
たが

「フツ!!」

その前に青年は、何処からともなく手にしたナイフを、男に投げつけた。

「がああっ!!」

少女は自分の目を疑った。

一体どれくらいの力を込めたら、そうなるのか。

男の体はふっ飛び、マシンガンごと腕を木に縫い付けられていた。

そんな光景に我を失っていたのは、男達も同じだった。

やっと、頭の処理が追いついたのか

「て、テメエ。　構わねえ、殺せ!!　撃ち殺せ!!」

男達は慌て銃を構えるも、既に青年の接近を許していた。

そこからは、見るも鮮やかな、青年の独壇場だった。

腕を捻りながら、投げ飛ばし

銃を叩き落として、顎を蹴り砕き

鳩尾など、正確に急所を打ちぬき

背後に回りこみ、首を締め落とす

瞬く間に男達は無力化されていった。

そんな一幕が終わった後も、少女はずっと青年の後ろ姿を見ていた。

青年は、倒した男達を縛り付け、どこかに連絡した後、少女のいる方に歩いてきた。

そして、屈み込みながら、さっきまでの口調とは違う、優しい口調で尋ねてきた。

「怪我はないかな？」

「あつ。だ、大丈夫です。何ともありません。」

突然尋ねられたことに驚きつつ、少女は答えると

青年は、「そうか。なら、良かった。」とつぶやくと、立ち上がった。

「じゃあ、お」「あのっ…。」、「ん、何かな？」

「どうして、あなたは私のことを助けてくれたんですか？
そんなに、力を持っている人なのに。」

「どうして、見ず知らずの、私のような力の無い者を助けてくれたんですか？」

少女の常識では、力のある者が一番偉かった。

力が無くては、この世界を生き残ってゆくことは出来ないからだ。

だから、力の無い者は、力のある者のところに集まる。

力のある者に、守って貰うために。

力の無い者は、死んでも文句を言えない。

しょうがない。弱いから。

それが、少女の常識だった。

でも、目の前の青年はそうではなかった。

力の無い者に対して、まして見ず知らずの人間に対して、何の躊躇うことなく助けてくれた。

それが当たり前のように。

だから、少女は思わず聞いてしまっていた。

どうして助けてくれたのか、と。

すると、青年は困ったように笑みを浮かべながら

「なりたいたいものが…、あつたんだ。」

と、自分に言い聞かせるように語り出した。

「絶対に届くことはないとはわかってはいたんだけど、理想ゆめがあつたんだ。

…じいさんから、借りたものなんだけどな。

すべてを救える『正義の味方』になりたいって。

綺麗だと思ったんだ。

もしそうなれたら、どれだけ素晴らしいんだろうなって。

でも、実際は、現実はそうはいかなかった。

何度、自分の理想と真逆のことをしてしまっただか、わからない。助けた人に裏切られたりもした。

正直、自分の信じた理想に折れそうになったんだ。

でもさ、例えどんなに苦しくても、傷ついても、目指したものは間違いじゃないと気づけたんだ。

俺が途中で折れてしまったり、俺自身がまがい物だったとしても、進んできた道は間違いじゃない。

胸を張ることはできるんだって、そう思えたんだ。

だから、俺はもう迷わない。この道をひたすら歩いていくことにしたんだ。

…それでも、あの時の自分に力があればなんて、考えたりするときもあるよ。

…力があればいいってもんじゃないんだけどな。

足掻いて。足掻いて。それでも助けられない命があった。

だから…、もし…、今…、力を持っているんだとしたら。

他の人には出来ないことが出来る力を持っているのなら。

それを、うまく使おうと思ったんだ。

もう一度くれたチャンスを、手に入れたものを、無駄にしないようにしなきゃいけない。

それで、一人でも多くの人を助けられるなら、いいと思ったんだ。」

そう言い終えると、「まあ、無理するなって、怒られてるんだけどね。」と、イタズラが見つかった子供のように、苦笑いをしていた。

「じゃあ、俺はもう行くね。」

そう告げると、青年は立ち去っていった。

夕暮れの中、温かく湿った風が少女の頬を撫でつける。

もう二度と会うことはないんだろうな、と少女は直感で感じていた。

少女は只、ずっと見えなくなるまで、その紅い大きな背中を見つめていた。

Interlude 1 (後書き)

何か文章が固いというか、読み辛い感じがします。

如何に他の方々が凄いかですよね〜。

そして、なにより

士郎の権能、どうしよう…

今のところ考えているのは、聖杯戦争時（全ルート）に倒した英霊全部（エミヤが倒したものの含む）なんですが…

ご都合主義、キタ（笑）

具体的にどう詰めていくか。

もう、私の黒歴史ノートのおもむくままに書いていいのだろうか。

あの英霊たちの能力を権能にすると、軽くチートになるような。

ほかの魔王も、似たようなものか。

初心者ですので、何かアドバイスや感想がありましたら、よろしく
お願いします。

どんなものでも構いません。

文字数稼ぎのテクはあるのだろうか…

Episode 1 - 1 胎動（前書き）

冷静に考えて

少し調子に乗っていたかなと、反省しました。

でも、まあ楽しく書いていこうと思います。

今回のも読んで頂けると、嬉しいです。

今回も、本編とは関係ない…

Episode 1 - 1 胎動

【4月初旬 イタリア ブランデッリ家邸宅書齋】

パオロ・ブランデッリはイタリア最高の騎士である。

それに異論を唱える者はいない。

鍛え抜かれた肉体はまさしく鋼のようであり、間もなく四十を迎える歳でありながら青年のように若々しく、彫りの深い顔立ちは端正に整い、知性と気品に満ちている。

…このような人物を『最高』と呼ばずに何と呼ぶのか。

そんなパオロであったが、久しぶりに家に帰ってきていた。

数週間振りの帰宅だろうか。

彼は自らの書齋で体を休めていた。

彼の書齋は整然としており、品のいい調度品が置かれている。魔術的な物も混ざっていたが、全体的に落ち着いた感じのする部屋だった。

ともかく、彼はゆっくりと息抜きをしていた。

それも仕方がないだろう。

《赤銅黒十字》の総裁を務める彼にとって、ここ数週間は文字通り忙殺されていたのだから。

…サルデーニヤ島の事件に始まり、今回クラブリアの海岸に打ち上げられたゴルゴネイオンと、次から次へと問題は増え続け、休暇もなかったからだ。

自らの責務を果たそうとしたのだが、周りの部下に諭されて、ようやく束の間の休暇をとることにしたのだった。

パオロが書斎でくつろいでいると、ドアからノックの音がして、1人の青年が入ってきた。

「お久しぶりです。」

お休みの中、申し訳ありません。」

「おお、土郎か。」

別に構わないよ。

皆のお陰で、だいぶ休ませてもらったからね。

それに頼みごとをしたのは、私の方だ。」

「いえいえ。」

…こうしているのも何ですから、俺が紅茶を淹れてきますよ。

お茶でも飲みながら、ゆっくり話しましょう。」

パオロは少し困った顔をしながら

「君にそんなことをさせるのは間違いだということぐらい、わかっているのだがね。」

しかし、君が淹れてくれるお茶は格別だからさ。

…お願いしようかな？」

「ハハツ。別に構いませんよ。」

俺が好きで淹れてるんですから。」

衛宮士郎はそう笑いながら、紅茶を淹れ始めた。

周りに紅茶の香りが漂い、2人はソファに腰掛けながら、ゆっくりと紅茶を飲み始めた。

「さて、と。」

パオロは紅茶の味を楽しんだ後、飲んでいたティーカップを静かに置き、本題に入った。

「例の件の調査は、どうだった？」

士郎も、ティーカップを置きながら語り出す。

「師匠の推測してた通り、あれはアフリカから出土したものでしょう。」

霊脈の流れに乱れを感じましたし。

…恐らく、相当名のある神が関わっているかと。

俺が最初に考えていたものよりも、根が深いもののようにです。あれは、単純に《蛇》を象っている訳ではないみたいですね。

あれを求めて、まつろわぬ神の方も動き出してるでしょう。」

「ふむ。」

やはり、そうだったか。

…君にアフリカまで行ってもらって、正解だったよ。」

パオ口は納得したようにため息をつくとき、士郎を見ながら話を続けた。

「本来、君達のような『王』に、一介の魔術師である私が指図するなんて、冒瀆もいいところなんだが…」

君の人柄を見ていると、つつい頼りたくなってしまっただよ。」

苦笑するパオロに対して、士郎は

「いいんですよ。」

貴方には恩もありますし、信頼もしています。

何より、俺自身もやらなきゃいけないと思ってましたから。」

「…そう言っただけだと、助かるよ。」

報告を一通り終えたので、また紅茶を飲んでいると、士郎が思い出したかのように

「そういえば、ゴルゴネイオンは今どこに？」

ここに来る時だって、大変でしたし。

何ですか、あれ？

コロッセオが半壊してましたけど。

新聞にはテロとか書かれてましたが、とてもそうには……」

士郎が考え込んでいると、パオロは心底困りきったようにため息をついた。

…彼がそんな表情をするなんて、只事ではないので、士郎は緊張した。

「ああ、それが…
…エリカの奴がね、草薙君に決闘を挑んでね…

幸い怪我人は出なかったが、彼の権能である第五の化身『猪』が突っ込んだらしい。」

これには、士郎も頭を抱えた。

「なんでさ…
何してるんだよ、エリカ。それに、草薙君も。」

草薙君は最初会ったとき、まともな人物に見えたんだけど…
実際に戦わせると、勝つためにとことんやり始めるし。
変に思い切りがいいというか、いかにも魔王らしいというか。」

士郎も呆れかえっていると、パオロも苦笑しながら

「本当は君に託したかったんだけど、エリカが草薙君に託して、試すべきだと。
ウルスラグナを殺した『七人目の王』の力を信じてくださいって、エリカに言い包められてしまっ…」

「それは俺も興味があるので、いいと思いますよ。」

それに、俺は誰も正体の知らない『謎の王』ですよ？

師匠以外誰も知らないんですから、流石にマズいでしょ。」

「ハハハ、そうだったよ。」

2人は笑いあつた後、士郎はティーカップを片付けると、立ち上がった。

「行くのかね？」

「はい。」

あれだけの神具を求める、まつろわぬ神ですからね。草薙君ひとりって、いうのも不安なので。」

「それに」と続けて

「彼はまだ自分の権能を把握しきっていない。いくら神を殺したとは言え、元は学生です。」

自分の限界、ペース配分、タイミング、周りに与える影響など。それらを知らなかったり、間違えたりすれば、死に直結する。只でさえ、神という非常識な相手に戦わなければいけないのだ。神の権能を篡奪したカンピオーネとは言え、一步間違えれば簡単に

死ぬ。

「彼が死ぬことによって悲しむ人も居ますし、まつろわぬ神々を止める存在がいなくなるのは、痛い。」

それで悲しむ人が更に増えるなら、尚更見逃せる訳がありません。」

普段は温厚な士郎だが、その鷹のような鋭い目には、決意の色が見える。

パオロは、彼のその目を見ると、頷きながら

「そうか……、じゃあ、頼むよ。」

行ってくるという。

君自身の理想の為にも。

ただし、今回はあくまでも様子見だがね。」

パオロは、少しお茶目に言いながら付け加える。

「それは、わかっていますよ。」

では、失礼します。」

士郎はパオロの書斎から、出た。
扉の閉まる音が、耳に残る。

…比較的平穩であった日々の終わりを告げるように

扉は、完全に閉まった。

.....

↳ 士郎 Side

士郎は廊下を歩きながら、今後のことを考えていた。

草薙護堂のこと

ゴルゴネイオンのこと

そして、自分自身のこと

草薙護堂の件は、大丈夫だろう。

まだカンピオーネとしては新米で未熟だが、才能はある。

いずれ、他の『魔王』たちに匹敵するだけの力を持つだろう。

それに、エリカもいる。彼女が全力で彼をサポートするだろうから、
安心だ。

何かあったら、俺が全力で彼らを守ろう。

もう1つは、最も身近な問題だ。

もう既にまつろわぬ神は、あれを求めて草薙護堂のいる日本に向かっただろう。

あれは、遠ざければ良いという問題ではない。

単純に『ゴルゴン』や『メデュサ』といった存在なら良かったのだが、そうではないとすると、厄介だ。

『地母神』と言っても幅広い。

どんなまつろわぬ神が来てもいいように、準備をしておくでしょう。

最後の1つは…、どうするのか。

少し考えて、馬鹿らしく思えてきた。

元々終わっていたはずの人生を、チャンスを、また手に入れることが出来たんだ。

人を助けることに、何を躊躇う必要があるのか。

例え、正体がバレて、嫌われてしまっても構わない。

それで大切なものを守れるなら。

後は只、自分の信じた道を駆けるだけ。

そんなことを考えながら、廊下を歩いていると、1人の見知った顔を見つけたので、声をかける。

アリアンナ・ハママ・アリアルデイ。
エリカ直属のメイド……もとい、部下の女性。

「やあ、アンナ。久しぶり。」

「し、し、士郎さん!？」

こちらを振り返ると、目を丸くして驚かれた。
…そんなに驚かれることをしただろうか。
アンナみたいな善人に露骨に反応されると、何か悪いことをしてしまっただか不安になる。

「あつ、あの、いつお帰りになられたんです?」

「ついさっきだよ。」

ちよつと今、無事に帰ってきたことを師匠に報告した帰りさ。」

「そうでしたか…。」

「無事で、良かったです。」

それを聞いて、ホツとしたようにアンナは呟いた。士郎も

「アンナも元気そうで良かったよ。それよりも、エリカの奴の面倒を押し付けちまって、ごめんな。色々迷惑を掛けてると思うけど。」

本当に、彼女には頭が下げる。

「いえいえ、そんなことはありません！

エリカ様には、よくしてもらってますし。

むしろ、私のような人間に目をかけてくださって、感謝してるんです！」

アンナは《赤銅黒十字》に所属しているが、魔術師ではない。

正確には『見習い』という事になっている。

アンナ自身、魔術や剣の才能がなかったからだ。

いや、華奢で女性のアンナが、剣を振り回す姿は考えられないか。

…何人か、男よりも腕っ節のある女性達を知っているが、一緒にしては駄目だろう。

あれはまた、別枠で考えるべきだ。

でも、アンナの良いところは才能が無いことにめげずに、一生懸命自分の出来ることをやろうと頑張っているところだ。

そんなアンナを、士郎は応援していた。

「そうなのか…」

あとさ、アンナ。前から言ってるけど、俺に敬語使うの止めないか？
同じ年なんだからさ、普通にしゃべってくれて構わないんだ。
逆に敬語なんて使われてると、敬遠されてるみたいで、俺は嫌だぞ
？」

「そ、そんな。

敬遠してるわけではないのですが…

士郎さんに敬語を使ってしまうのは、私自身の問題といえますか…」

顔を若干赤らめ、小声で呟きながら、下を向いてしまった。
そんなアンナに、士郎は頬をかきながら

「無理にとかは言わないからさ。

アンナが話しやすいなら、それでもいいけど。

もっと親しんだ感じで話してくれると俺もうれしいかな。」

そこで一端話を切り、士郎は先程から気になっていたことを聞いた。

「そういえば、この荷物は何だ？

引っ越しするみたいな量だけ…」

すると、アンナは用事を思い出したのか、慌て始めた。

「そ、そうでした。実はエリカ様が、護堂さんのお傍に行くとのことで、その準備をしていたんです。」

「は？」

傍に行くって、この量。

あいつ、日本に住む気なのか!？」

「ええ、そのようですよ。」

私も一緒に行くことが決まりましたし。

それに、まつろわぬ神と戦う為にも、必要らしくて。」

士郎はため息をつきながら

「はあ、何考えてんだか。エリカは。

まったく、いつもあのワガママ姫は。

少しは自分の立場とか、振り回される周りの人のことを……」

「あら？」

私がどうかしたのかしら？」

後ろから声をかけられ

ギギギと、あまり顔を合わせないように、ゆっくりと首だけ後ろに振り返る。

「や、やあ、エリカ。久しぶり…だよ、な？」

士郎の後ろから、赤い美少女が歩いてきた。
長い赤みがかった金髪が、騎士の兜や王冠のように見える。
渦中の人物、エリカ・ブランデツリだった。

「ええ、お久しぶりですわ、士郎。

それで何かしら？

愛する人の居る場所の傍に行ってはダメだとしても、言うのかしら？

まして、あの方は『王様』。

騎士として、お傍に馳せ参じるのが私の責務でしょう？。」

言いながら、エリカは笑った。

怖い……ひたすら怖い！

見惚れるような笑顔だが、目が笑っていない！

とても『イイ笑顔』で俺のことを見ているけど、正直生きた心地が
しない…

どうして俺の周りには、こんな『イイ笑顔』をする人が必ず1人は
いるのだろうか！？

前の世界でも、凜がたまにこんな『イイ笑顔』をしていたし。

そういえば、エリカと凜の印象って、どっちも『赤い』よね、と馬鹿なことを考えていても何の解決にならない。

考える。今の状況を打開する方法を…!!

ともかくエリカの機嫌を直してもらわなくては…!!

「いやいやっ、そんなダメって言う訳ないだろう!？」

…あゝ、そのなんだ。

この後、なんかご馳走するからさ。

…それで、だめか?」

すると、エリカは何か良いことを思いついたのか、笑顔のまま

「そうね…

ご馳走してもらうのは別の機会にして、1つお願いを聞いて貰おうかしら。」

ここまできたら、毒を食らわば皿までだ。

何でも聞いじうー!

「そのお願いって言うのは？
流石に、無理なことはやめてくれよ？」

「そんなに難しいことじゃないわよ。」

「これから、私たちは護堂のいる日本まで行く訳なんだけど、
私はいいわ。愛する護堂がいればそれでいいもの。
でも、そうするとアンナは一人残されてしまうわ。」

だから、士郎がたまに日本に来て、アンナと二人っきり（…）で買
い物とかに付き合っただけで欲しいのよ。
無理にとかわないから、できる範囲で。」

「エ、エリカ様！？」

エリカの『お願い』を聞いた瞬間、アンナは顔まで真っ赤にして慌
て始めた。

一人わかっていないのか、士郎は首をかしげたまま

「？

そんなことでいいなら、いくらでもするけど…

いいのか？それで。」

「いいのよ。…主にアンナが。」

「そ、そんな…！」

し、士郎さんだって、ずっと世界を飛び回って忙しい訳ですし、
迷惑をお掛けしますし、来てただななくても！？」

「いや、別に俺は構わないぞ？」

この後、当分遠くに出かける予定ないし。

そういう理由なら、俺はいくらでも協力するぞ。」

「なら、決定ね。」

エリカは、してやったりという笑顔のまま、そう締めくくった。
アンナは、また下を向いて

「どうしよう…」

士郎さんと一緒だなんて…

そんな、無理です…」

「あゝ、俺が嫌なら別の人にでも、たのm…」

「士郎さんでいいんですっ！！！」

普段のアンナからは考えられない、大きな声でそう言われてしまった。

士郎もエリカも、それに驚いていると、

アンナも自分自身が何をしたのか、理解してきたよう

「し、失礼しましたっ！！！」

そう言い残して、どこかに行ってしまった。

「どうしたんだろう、アンナは？」

でも、本当にアンナはいい娘だよな。

俺みたいな奴でも、ちゃんと買い物とかに付き合ってくれらるって言うてくれるんだからな。

あいつ、結構人気あるだろうに。

ん？

エリカもため息をついて、どうしたんだ？」

「はあ、アンナが不憫に思っただけよ。

…どうして、私の周りってこんな朴念仁が多いのかしら？」

まあ、いいわ。

一郎、荷造り手伝って。アンナの代わりに。」

「手伝ってって。

お前、普段そついうのやらないだろうが。」

「いいじゃない。

それに、アンナが逃げちゃったのは一郎のせいですよ。」

「まあ、いいけどな。

で、どこからやればいいんだ？」

「じゃあ、その下着を詰めてくれない？」

「男の俺に、そんなことを頼むな!！」

「冗談よ。」

男で私の下着を触っていいのは、護堂だけだもの。」

「いや、そういう問題じゃないと思っただが…」

まるで実の兄妹のようにじゃれ合いながら、今日という日を過ごします。

まつろわぬアテナとの戦いの数日前の出来事。

草薙護堂にとっても、衛宮士郎にとっても、転機となる春を迎えようとしていた。

運命の齒車は、徐々に動き出す。

これから2人の神殺しがどうなるのかは、神にもわからない。

Episode 1 - 1 胎動（後書き）

そして、作者にもわからないWWW

迷走が続いていましたが、次回から護堂達ができます。

原作をあまり壊さないように、自重しながら頑張っていきます。

何か間違い等ありましたら、よろしくお願いします。

Episode 1 - 2 七人目の神殺し（前書き）

最初はこの1話にまとめるつもりだったんですが、ずるずると長引き、2話に分けることにしました。

出来のわりには時間が掛かったのですが、読んで頂けると幸いです。

Episode 1 - 2 七人目の神殺し

（護堂 Side）

草薙護堂は、七雄神社に向けて歩いていった。

妹の部活の先輩という、万里谷裕理という少女に話があると呼ばれたから。

それも、デートとか甘い話ではなく、頭を抱えなくなるような厄介事の話。

最初何故電話が掛かってくるのか、わからなかったが、最後まで聞いて話が見えてきた。

『ゴルゴネイオンのことを知っていることから、恐らく』こちら側の人間だ。

万里谷は、欧州で言う魔術師の仲間みたいなものなんだろう。

電話の話にあった、件のゴルゴネイオンは、背中のシオルダーバックに入れてある。

やっぱり、これは相当危険な物品らしい。

200段はありそうな階段を登りながら、護堂は少し思い出に浸っていた。

思い出すのは、ここ半年間の出来事。

平和な日本の、ましてや15歳の少年が経験する範疇を越えている、数々の危険。

前時代的な剣や槍、斧といったもので襲われたり、脳髓を沸騰させて死ぬ呪詛とやらの直撃を受けたり、地獄から来たという馬の蹄で踏み潰されそうになったりと、両手で数えきれないくらいの様々な

経験。

一番最近のだと…
全てを斬り裂く魔剣に斬られたり、自分より大きい剣が檻のように、自分の周りに何本も突き刺さったりしたことが。

改めて考えると、一般的な高校生の生活からは大分かけ離れてしまっているような。

少し憂鬱になっていると、階段も終わりが近づいてきた。

万里谷という少女に会うのも、あと少しだ。

さあ、気を引き締めていこう。

〈祐理 Side〉

祐理はこれから来るという、草薙護堂という少年について、考えていた。

遠いイタリアの地で、何でそうなったかわからないが、軍神ウルスラグナを殺めたという少年。

この世で、たった7人しかいない『カンピオーネ』と呼ばれる存在。特にこれと言って、特殊な経歴を持たない普通の少年が、神を殺すという偉業を成し遂げ、日本にいたこと。

更にその少年が、自分の所属する茶道部の後輩のご家族で、同い年であること。

そんな嘘か本当か、わからない事実を確かめるために、彼をここに呼んだのだった。

草薙護堂が『カンピオーネ』であるか確かめるのに、彼女が選ばれたのには理由がある。

霊視に優れた媛巫女であり、過去に『カンピオーネ』に会ったことがあるからだ。

そういう理由から正史編纂委員会の方から、祐理が指名されたのだった。

しかし、祐理自身『カンピオーネ』という単語を聞くと、どうしてもあの恐ろしさが蘇る。

デヤンスタール・ヴォバン。

東欧にいる『魔王』の一人。

暗闇で燃える猛虎の双眼じみたエメラルドの瞳を、祐理は一生忘れることは出来ないだろう。

四年前の儀式にも、祐理は呼ばれた。

あの儀式のことは……正直よく覚えていない。

自分達と同じような巫女が30人ほど集められ行われた、『神の招聘』の儀式。儀式自体は成功したものの、神を呼び出すという行為に、大半の意識を持ってかれてしまったからだ。

1つだけ僅かに覚えていることは、まつろわぬジークフリートが招聘され、戦いが始まった時。

同じように儀式の影響で意識を持って行かれ、儀式場に取り残された私達を守るように立っていた、紅い背中。

私達を助けるために、神とカンピオーネの決闘から守るように戦い、儀式場から連れ出してくれた。

気付いた時には、儀式場からは遠く離れた場所にある、小さな診療所のベッドで寝ていた。

後から、診療所を営む魔女の方から話を聞くとフードを被った男性が私達を連れてきてくれたらしい。

幸い処置が早かったお陰か、数人は意識を取り戻すことができたのだった。

あの人も『カンピオーネ』なのだろうか。

また、会ったらきちんとお礼をしたい。

そんなことを考えていたら、1人の少年が階段を上ってきた。

あれが草薙護堂なのだろう。

祐理は静かに気を引き締めて、『王』を迎えた。

く 土郎 Side く

エリカ達を日本に送り出し、遅れること数時間。土郎は、日本に到着していた。

「日本か…」

久しぶりだな。」

これまで世界各地を旅してきた土郎だが、日本に帰ってくるのはいつ以来だろうか。

前の世界のも含めて、もう10年近く日本に帰ってきていない筈だ。いつでも、日本に帰ろうと思えば帰れたのだが、日本に帰ろうと思わなかったのは、『冬木市』がなかった事も大きい。それを考えると、改めて異世界に来たのだなと思う。

「さてと…」

いつまでも感傷に浸っている訳にはいかないからな。」

元気付けるように、空港のベンチから立ち上がる。

まずは、地形を把握するでしょう。

もしかしたら、自分の知らない建物があるかもしれない。

何があるか、わからないのだから。

出来ることはやる。

恐らく、エリカ達がまつろわぬ神に接触するのに、そんなに時間はないだろう。

土郎は、空港のロビーをあとにした。

神社の境内で、祐理と話をし始めたのだが、そこから大変だった。

祐理には、敬語が使われたりと変に誤解をされているわ

ゴルゴネイオンの扱いについて、夜叉のような祐理に説教されるわ
エリカが急に現れて、場がさらに荒れるわ

まつろわぬ神が日本に来ていることを知らされるわ

でも、祐理のお陰でまつろわぬ神がなんなのかわかったのは、収穫
だった。

ゴルゴネイオンは祐理が預かってくれたので、エリカと共に神社を
飛び出した。

1つだけ納得いかなかったのは、アンナさんが車で現れたことか。
エリカも苦渋に満ちた声で護堂に聞こえるように

「…仕方ないじゃない。

私だって選択の余地があるのなら避けて通りたいけど、一刻も早く
アテナと会うには車が一番だし。

…こんなことなら、最初から士郎に付いて来て貰うんだっただ。」

護堂は、エリカが自分以外の男性を親しげに名前を呼ぶことに驚い
た。

「シロウって、誰だよ？」

「あら？言っただけじゃなかった？」

私の兄弟子よ。

放浪癖があるんだけど、最近帰って来たのよ。

…ちよつと変わっているけど、普通の魔術師よ。」

「…それだけ聞くとロクな人には思えないんだが。

大体ちよつと変わってるって、何だよ？」

「別にそんなに変な人じゃないわよ。

…女としての自信を無くすくらい、家事が上手だったり

ガラクタや壊れた物を直すのが趣味だったり

困っている人を見ると、最後まで面倒見ちゃったり

普通の人なら嫌がることを平気でこなしていく人なのよ。」

護堂は話を聞きながら、感心していた。

この傍若無人なエリカに認められている、数少ない人の1人なのだ。どのような人物なのか、護堂は興味を覚えていた。

「まあ、騎士団の仕事で忙しいでしょうし、無いものねだりしても仕方ないわね。

…いつまでも待たせる訳にはいかないし、行くわよ…。」

「わかったよ。

…そういえば、アンナさん、国際免許なんて持ってたのかよ…。」

あの運転で合格させるなんて、イタリアの教習所には問題があると思っぞ！」

「言っておくけど、あの子が免許取ったのって日本でらしいからね

！」

などと、小声で話をしながらアンナさんの車に乗り込む。
2人がシートベルトを締めた瞬間、一見普通の車は暴走車と化して
いた…

（ 士郎 Side ）

高層ビルの屋上に士郎の姿はあった。

ここから、2キロ程離れた場所に七雄神社が見える。

士郎は、魔術で強化した目で護堂達を観察していた。

護堂とエリカの他に、巫女？が話し合っているのが見える。

既にエリカの元には、まつろわぬ神が来たことは伝えられている筈
だ。

そこから、護堂達がどのように対応するのか。

草薙護堂は『カンピオーネ』としての責任を果たすことができるの
か。

それを見極めなくてはならない。

以前にイタリアで会った時（フードを被っていたため、顔を会わせ
てはいない）は、大丈夫そうに見えたので、心配する程でもないだ
ろう。

「さあ、どうするのかな？」

…おっ、動きだした。」

何か判明したのか、護堂達が神社を慌て飛び出した後、エリカがどこかに電話しているのが見える。

その後、凄まじいスピードを出しながら、一台の車が現れた。

「あゝ、そっか…」

どこかに移動しようとするのなら、それが一番早いよな…

…草薙君、頑張れ。」

もはや、ご愁傷様と言っしかない。

アンナの可愛らしい顔とは、正反対の全然可愛くない運転は何度乗っても慣れるものじゃない。

あの運動音痴なアンナのどこに、あれだけのドライビングテクニックがあるのだろうか。

…つつ込んだら、負けな気がする。

きつと、彼女のことだ。

自覚ゼロのまま、ボケ倒すだろう。

そんな無駄なことを考えていると、件の車が走り出す。

…うん、今日も時速100キロはいつてるな。

ハリウッドも真っ青の車が、東京の街を走っていった…

そのまま、千葉県習志野の海岸まで、数十分。
やつれた感じで護堂達が車から出てきた。

ここまで無事故で、1回も捕まらないアンナが相変わらずスゴいと思っ

いかん。脱線してしまった。意識を戻そう。

エリカは探し物の魔術を使っているのか、そのまま護堂と海岸を歩いている。

海は穏やかで、海岸は夕日に照らされ、良い眺めだ。

何事もなければ、良かったのだろうが、この先に神がいるのだろう。護堂達が10分程歩いていると、1人の銀髪の美少女が立っているのが見えた。

……否。

あれは、少女…ではない。

まつろわぬ『神』だ。

この世界に来て、一番変わった事。

『神』と遭遇すると、自然と体が戦闘態勢になる。

まつろわぬ神とは、遠く離れた場所にいるが、それでも反応する。

あれは、『敵』だ。

体の隅々まで、力が行き渡っていく。

いつでも、あの神と戦う準備はできている。

しかし、今回まつろわぬ神と戦うのは自分ではない。

護堂はどうするのか、高みの見物とさせて貰おう。

そのまま観察していると、護堂とまつろわぬ神は話し合っているようだ。

大方、帰ってくれるかどうか交渉しようとしているのだろう。

この護堂の対応には、好感が持てる。

戦いというのは、どんなに小さくても、周りに被害をもたらす。

だから、無駄な戦いや避けられる戦いは、できるだけ避けるべきだ。

だが…、このまつろわぬ神にそれが正しかったのだろうか。

すると、まつろわぬ神が護堂の方に歩いていく。

「一体、何をするつもりだ？」

目を凝らしていると、まつろわぬ神は突如護堂にキスをした……

士郎は、一瞬呆けた。

誰がキスをすると、予想できたか。

そう考えて、士郎はある可能性に気付いた。

「まさか……！！」

『死』の言霊を直接吹きこまれたか！？」

『カンピオーネ』は魔術・呪詛の類に強い耐性を持つ。

神々といえど、そう簡単には術中に陥れることはできない。

しかし、1つだけ例外がある。

体内に言霊を直接吹き込むので、あれば話は別だ。

そうすれば、強い耐性を持つカンピオーネでも、簡単に陥る。

案の定、護堂の体はゆっくりと崩れおちていく。

「やられた。騙し討ちかよ。

草薙君のお人好しな性格につけ込み、カンピオーネの弱点を突くとはな。」

エリカが護堂を守ろうと飛び出した。

だが、その顔に焦りや恐怖は無い。

あるのは、戦う緊張感だけ。

エリカは横たわる護堂を一瞥すると、まつろわぬ神に戦いを挑んだ。エリカのような賢い奴が、何の考えもなしに神に挑む訳がない。戦うと言うより、逃げるタイミングを計っているという感じだ。

「何か、秘策があるのか？

落ち着いてるようだし。」

「草薙君もこれで終わりという訳ではない、ということか。」

僅かにだが、護堂の体から魔力を感じる。

これも彼の権能か。

考えられるのは、『雄羊』だろうか。

彼も中々悪運の強い。

まあ、そうでなくては神殺しなどにはなっていないだろう。

そうこうしている内に、鋼の獅子に乗って逃げるエリカと護堂の姿が見えた。
エリカが快心の笑みを浮かべているところを見ると、護堂は無事のようだ。

「さて、草薙君が復活するまで時間がかかりそうだし、どうなることやら？」

今のところ、まつろわぬ神が派手に暴れ出す感じはない。
エリカ達もとつくに遠くの方に行った。
あれだけ離れば、もう大丈夫だろう。

そう確認すると、土郎はビルの屋上から立ち去った。

Episode 1 - 2 七人目の神殺し（後書き）

だんだん書くペースが遅くなっている気がします。
詰まっているというか…

今回も次回も、士郎は傍観です（笑）

おかしな点など、ありましたら、どんどん言っして下さい。
よろしく願います。

E p i s o d e 1 - 3 決着（前書き）

予定より、だいぶ遅くなってしまいました。

今回も文章が上手くいかなかったので、ある程度落ち着いたら、書き直したいと思います。

こんな感じですが、読んで頂けたら幸いです。

Episode 1 - 3 決着

あれから、2時間が経った。

まつろわぬ神は、ゴルゴネイオンを求め、歩いていた。

草薙護堂は、ゆっくりと眠りから覚めようとしていた。

まだ、神と神殺しの戦いは終わっていない

〈アテナSide〉

夜に近い東京の街は、今日も平和だ。

徐々に街には、蛍光灯や車のライトが付き始める。

数千年前と違い、人々は『火』や『灯り』を使い、『闇』を打ち消した。

今宵も街のあちこちで、人工の光が灯る。

喧騒に包まれたこの街は、夜になっても眠ることはないだろう。

アテナは歩きながら、太古の昔と変わり果てた世界を眺めていた。彼女は、そんな世界を忌々しく思っていた。

『夜』という『陽』がない状態でも、街は真昼のように明るい。

照明という人工の光は、自然と『闇』を追い払う。もはや、完全な『闇』はそこには存在しない。

人は『闇』を感じずに、光の中で日々過ごしている。そこに、かつての恐怖は存在しない。

女神はそれが気に食わない。

『夜』とは、『闇』が支配する世界。

何も見えない『闇』という世界に、人は本能的に恐怖を感じる。

五感に頼る人は中でも、『見えないこと』に未知なるものを感じ、恐れてきた。

だから、人は見えない『闇』の世界に畏怖の感情を抱き、光を強く求める。

それが女神が考える、人があるべき姿。

また、人は本来与えられた時間を更に伸ばす事にも成功した。現代では、それが特に顕著だ。

眠るべき時間に起き、朝まで活動する。

『夜』という制限を無くした人々は、常に動き続けている。

夜明けと共に起き、日没と共に眠るといふ、人本来の生活の面影はもうない。

女神はそれが気に食わない。

『夜』とは、『闇』が支配する世界。

人は『闇』という恐怖から逃れる為、『夜』に眠る。

また、『闇』にはこの世ならざるものが存在すると信じられてきた。

それが今日の妖怪や悪魔、幽霊といった考え方に繋がっている。だから、人は自らの身を守るためにも『夜』に眠り、『朝』が早く来るように待ち続ける。

それが女神が考える、人があるべき姿だった。

さて、話を元に戻そう。

アテナは人の多い街中を歩いていた。

しかし、その姿が人ごみに隠れることはない。

そこだけ穴が空いているように誰もいないからだ。

そんな明らかなイレギュラーが街を歩いても、誰も気づかない。いや、気づけない。

神はそこにいるだけで、周りの人間の行動や心を狂わせる。

だから、アテナの周りには誰もいないし、見向きもしない。

故にただ1人、歩き続ける。

アテナは、確信していた。

求め続けていたゴルゴネイオンはあと少し行けば、手には入ると。

もうすぐに失われた三位一体を取り戻すことができる。

ふと、視線を感じた。

後ろを振り返るが、誰もいない。

そもそも、自分を直視できる人間などそういない。

彼奴らを除いて。

しかし、もう彼奴らはこの国にはいないはず。

他の神なら気のせいにするかもしれないが、アテナの何かの気のせいでとは思わせない。

フクロウのような目が、偶然遙か遠くの人影を捕らえた。

高層ビルの上、こちらを見続ける――紅い外套を着た男が立っていた。

アテナと男の視線が静かに交差する。

男はこちらの視線に気づくと、ゆっくりと踵を返し、そのまま何処かに行ってしまった。

視線が合ったのは、一瞬だけ。

しかし、それだけで充分。

――面白い

闘争の神としてのアテナの心に火がつく。

まだこの国には己を楽しませてくれる存在がいる。

戦う気はないようだが、次第にそうは言っていられなくなるだろう。このアテナが三位一体を取り戻し、真のアテナになった時こそ、勝負の時にふさわしい。

――そういえば、彼奴はあの後どうなったものか？

先程の海岸での一幕をふと思い出す。
死の言霊で打ち倒した筈だが、わからない。
神殺しとは、不可能を乗り越え、神すら殺めた人間の行き着く先だ
と言つ。

そんな存在があんな簡単に死ぬだろうか。
もしかしたら、死すら克服して甦るかもしれない。
だが、それもまた良し。

その時は、このアテナの武勇を以て打ち砕こう。

……それまで少し、遊んでみるか。

そう考えていると、何だか興に乗ってきた。

元々、ここは居心地が悪すぎる。

人の手で作り上げられた世界は、彼女にとって不自然すぎるからだ。
そう思った彼女は早速行動に移した。

アテナが歩くたびに、街から光が消えていく。

彼女が通り過ぎた後は、ありとあらゆる人工の光が消えていった。

偽りの光が消え失せ、代わりに街を満たすのは真なる「闇」

月光が尊く感じる程の、見渡す限り何も見えない「闇」

人々は、急に訪れた異変に戸惑いを隠せないでいた。

ある者は怒り、ある者は不安に陥り、ある者は恐怖に震える。

街のあちこちで、同じ混乱が起きていた。

あたかも太古の昔の人々のように、街の人々は『闇』を恐れた。

――そうだ。

人間共には、それが一番ふさわしい。

これこそ、『夜』という世界が本来あるべき姿なのだ。

アテナは、そう満足げに笑みを浮かべ、闇に覆われた街を悠々と歩いていった。

（ 土郎 Side ）

「面倒なことになったな……」

先程、土郎のいる場所も闇に包まれた。

土郎はずっと女神の後ろを一定の距離を保ちながら、追いかけていた。

しかし、こう暗くは大雑把な場所と進んでいる方角くらいしか、わからない。

見えなくはないのだが、距離を詰めないと見えにくい。

しかも、その範囲は拡大し続けているときた。

仕方ないので、もう一度女神の大雑把な場所を確認する。

「このままずっと行くと、さっきの神社周辺か…
…安全な場所に預けとくのは構わないけど、肝心の君がやられちゃ
ったら、意味が無いだろ…」

今回のまつろわぬ神は、目的が分かり易くて助かる。

ゴルゴネイオンを取り戻す。それだけ。

それ以外に興味はなし。

だから、被害は今のところ少ない。

辺りから、人工の光や火を奪うという傍迷惑なものを除いて。

あの神様からしたら、遊んでいるだけかもしれないが、一般人はた
まったものじゃない。

灯りは消え、交通機関は完全に麻痺。

眼下の人々には、恐怖と混乱が広がっている。

改めて、まつろわぬ神という存在は、天災かそれ以上だと思う。

「草薙君もいつになったら、来ることやら。

…いや、待て。

この状況でどうやって彼はここまで来るつもりなんだ？」

最初の接触から、かれこれ4時間が経とうとしていた。

未だに、護堂達の姿は見えない。

多分、この状況だ。

どこかで足止めをくらっているのだろう。

「最悪、俺が出るかもしれないってことか…
さっきバレたから、あんまり近づきたくないんだけどな。」

まさか、あの距離から気づいてくるとは。
なかなか厄介というか、勘のいい女神様だ。
お陰で迂闊に近づけやしない。

そんな事を考えている内に、目的地が徐々に近づいてきたらしい。
だんだん、まつろわぬ神の歩くスピードも速くなっている。

長年追い求めていたからだろうか。
女神の頬は緩み、微笑んでいるように見える。
見るものを圧倒する、美しさと儚さ。
そついう所は、いかにも女神らしい。

一瞬、女神の足が止まった。
少し向きを変えると、再び歩き出す。

「ん？
神社の方向から、少し離れる…」

それと同時に、辺りの人々が離れるように動き出す。
恐らく、人払いだろう。

もう、そんなに遠くはないらしい。

…ゴルゴネイオンが奪われるのはもう時間の問題だ。

ゴルゴネイオンを手に入れ、本来の力を取り戻した女神はどうするのだろうか？

今までは比較的大人しかったが、このまま大人しく帰ってくれる保証はどこにもない。

人間には理解出来ない思考で、急に暴れだすかもしれない。

『お遊び』程度で、この災害状況だ。

確実に一般人に被害が及ぶ。

士郎は深呼吸をしながら、体を解す。

体は発見してからずっと臨戦態勢を保っていたから、いつでも行ける。

今回はあくまでも様子見だったが、仕方ない。

このまま草薙護堂が来ないのなら、あの女神が暴れだす前に倒すとしよう。

『錬鉄の神殺し』は静かに闘志を燃やしていた。

（祐理 Side）

闇に閉ざされた市街を、祐理は早足で進む。

周囲を歩く人など、1人もいない。
ゴルゴネイオンは、祐理が持つ包みの中に入っている。
祐理は戦いの被害が少なくなるようにと、東京湾方面を目指して、
闇雲に歩いていった。

先程、草薙さんから電話を貰った。

内容は、ゴルゴネイオンを持って待ち伏せしてほしい、というぶっ
飛んだ話だった。

普通だったら、相手にしないだろう。

しかし、そんな反則のような事をしないと、アテナに追いつけない
という事実気づいてしまった。

- - 誰かがやるべきことで、それが自分にしか出来ないことなら - -

だったら、名乗りを上げるしかないではないか。

囚役が1人なのは、余計な犠牲を増やしたくなかったから。

それに - -

普段は仕方のない人だが、こういう時はきちんと約束を守る人な気が
する。

草薙護堂という人は。

祐理はそんな確信していた。

どれだけ歩いたか、暗くてわからない。

言い知れぬ孤独感に心を折られそうになりながら、祐理は車道を突
っ切ろうとした。

後ろから声をかけられたのは、その時だった…

（ 士郎 Side ）

まつろわぬ神に追いついた時には、もう既に遅かった。

暗闇でよく見えず、バレないように迂回しながら進んで来たからだ。

辿り着いた時には、ゴルゴネイオンは巫女服の少女の手から離れ、

女神の手に収まっていた。

女神は微笑むと、高らかに謡いだす。

朗々と言霊が紡ぎ出される。

・・・歌うように。祈るように。讃えるように。

詠唱が進むにつれて、女神 - アテナの姿が変わっていった。

真の力を取り戻したアテナは、18歳程の乙女へと姿を変えた。

同時に吹きあがる膨大な魔力と冥府の冷気。

それらを受けながら、士郎は気づく。

今、最も神に近い場所にいる少女のことを。

カンピオーネであるから、たとえ直撃を受けたとしてもなんともないが、あそこにいるのは普通の少女。

多少呪術の心得があったとしても、防げるわけがない。

このままでは、あの少女は死んでしまう。

目の前で助けるべき人がいて、何もできないのはもうこりこりだ。

今の自分には、あの時とは違うけれど、新たな力がある。

力があることが、良いのではない。
ただ救えなかつたと、無力な自分を嘆きたくない。
力を求めるのは、そんな小さな、それでいて大きな理由。

ならば、そのために全力をつくす。

弓を投影し構える。

まだ矢はつがない。

アテナの注意をそらすため、いくつかの最適な剣の設計図を頭に浮かべ、『門』を用意していると

「矢もないのに、どうやって矢を放つおつもりですか？ - - 紅き王」？」

突然後ろから、声を掛けられた。

内心の驚きを隠しながら、土郎は振り返る。

そこには、よれよれのくたびれた背広を着た、二十代後半の男が立っていた。

冴えない感じを出しているが、歩き方からして、一般人とは違う。

一見地味な青年は、今気づいたように頭を下げる。

「紹介遅れました、正史編纂委員会の甘粕冬馬と申します。
以後、お見知り置きを。」

- 正史編纂委員会

日本の呪術界を統括している組織。

ここにいるということは、相当の手練。所謂、エージェント。
士郎は少し警戒しながら、

「君のような人物がここにいるということは、これは想定内ということかね？」

「いえいえ、とんでもありません。

私どもとしても、今回の件は完全に想定外ですよ。

「まあ、この際本音を言ってしまうと、草薙さんの噂が本当かどうか知りたかったのもありましたよ。

まさかこんな事態になるまで発展するとは思いませんでしたが。

」

とぼけた感じで、甘粕という青年は本音をぶちまける。

そんな甘粕に内心唾然としつつ、士郎は思っていた疑問を口にした。

「しかし、彼女がなぜあんな危険な物を持って逃げている？」

「待ち伏せ、とか言っていましたね。

なんでも草薙さんに頼まれたらしくて。

彼の権能の力でどうにかするみたいですよ。」

「待ち伏せ？」

聞き返す士郎に対して、甘粕は困ったように頭を掻きながら話す。

「ええ、そうなんですよ。

当然、危険だから代わるように言ったのですが…
適任者が自分しかいないと言って、結局1人で行ってしまった訳なんですよ。」

士郎は聞きながら、アテナと対峙する少女を見つめる。

顔は恐怖に引きつり、体は震えている。

無理もない。

あれだけの存在が目の前にいて、ましてや巫女なら、その異常性がよくわかる筈だ。

しかし、彼女はしっかりと両足で立っている。

普通の人間なら発狂してもおかしくないのに、意識を保っている。

何より印象なのは、その目だった。

強い意志を感じさせる目。

誰かを信じて待っている者の目だった。

決心がついたのだろう。

全ての迷いを振り捨てた顔で、万里谷という少女は精一杯に叫んでいた。

この誰もいない静かな空間。

少し離れていたが、ビルに反響して、士郎たちの所にも声が聞こえてくる。

七人目の魔王を呼ぶその声を。

士郎が目を見開いた、次の瞬間。

――風が吹いた。

初めは小さな風だったが、次第に大きくなり疾風となっていく。吹き上がる風と魔力の渦の中心に、忽然と草薙護堂が現れた。

驚く士郎は、同じように驚いた顔をしている甘粕に話しかける。

「なるほど。こんな隠し玉があったとは。」

「ええ。私も見るのは初めてですよ。」

…見た感じ、ウルスラグナ第一の化身『風』と言ったところでしょうか。」

護堂は、エリカに祐理を任せるとアテナと向き合った。

草薙護堂とまつろわぬアテナ。

本日2度目の闘いが始まるうとしていた。

士郎は思う。

まだ甘いところがあるが、それでも帳尻を合わせにやってきた。己の責務を果たし、弱き者を救う。

それだけの器量を草薙護堂は、しっかり持っていた。

士郎はそれを確認すると

「さて、私のような邪魔ものは、さっさと退場させて貰うつもりか。」

と苦笑を浮かべながら、弓を消した。

76

「おや、もう行かれてしまつのですか？
もう目的はお済みになられたので？」

甘粕は意外そうな顔をして、士郎の方を向きなおす。

「なに、私も君達と同じだよ。草薙護堂は『カンピオーネ』たる資質や責任を果たせるのかを知りに来ただけだよ。

場合によっては、私が代わりに戦つつもりだったが…

…もつとも、そんな必要はどうかやら無かったようだがね。」

そう告げると、甘粕に背を向け、歩き始める。

「そうですか、残念です。」

…是非とも、今後日本に来るときはご連絡下さい。

その時は、私が責任を持って日本をご案内しましょう。」

飄々としているが、どこか憎めないこの青年を、土郎は嫌いではなかった。

そっけない会話だったが、どこか話しやすい感じがした。個人的には、いい友人関係が作れそうである。

土郎はそんなことを考えながら、笑みをうかべ、

「ふっ。そのときはお願いするでしょう。」

そして、今度こそ立ち去った。

下の方では、戦いが今まさに始まるうとしていた。

く甘粕Sideく

「これは予想外の収穫ですねえ。本当に驚きましたよ。」

まさか、本物に会えるとは。」

紅き『王』を見つげられたのは、偶然だった。

万里谷祐理が囮役を志願したとき、説得をするも失敗。万が一があつては大変なので、こっそり後をつけていた。

いつでも動けるように近くのビルに隠れながら移動していたら、偶々見つけたのだ。

まさか、あくまでも推測の域を出なかつた『王』が実在するとは。姿がグリニッジの報告書と一致していたので、声を掛けて正解だった。

「思ったより、若い方なんですなえ。」

…それにしても、早速目をつけられるなんて、草薙さんもなかなか人気者のようです。

やっぱり、カンピオーネの方々って、物好きな方が多いですねえ。」

ここに護堂がいたら、全否定しそうだが、彼の独り言は続く。

「さて、馨さんに報告してきますか。」

情報工作の相談含めて、色々。

あっ。

そういえば、あのアニメは今日でしたけど、放送までに間に合うかなあ。」

相変わらずとぼけた感じの甘粕は、あの男だか女だかわからない上司に報告するため、音もなく姿を消した。

（土郎Side）

甘粕と別れ、また違うビルへと土郎は『移動』していた。新しい場所から、再び護堂達を観察する。

護堂達は、浜離宮恩賜庭園へと闘いの場を変えていた。

…それまでに様々な爪痕を残しながら。

ここに来て、2人の闘いは次第に熾烈になっていく。

護堂は黄金に輝く剣を無数に振るいながら、一撃を与えていく。

アテナも負けじと、全てを石へと変えていく。

まさに神話のような、幻想的な闘い。

そんな護堂の闘いを見ながら、土郎の意識は別の所へと向かっていった。

それは、護堂の振るう『剣』。

無意識のうちに、土郎の眼は解析をかけていた。

- 解析開始

- - エラー、エラー、解析不能…

見ただけでありとあらゆる剣を剣の丘に収める土郎だったが、何故か解析できない。

違和感を感じつつも、土郎は慌てることなく、1つの結論にいたる。この世界に来てから、増えたもう1つの例外

- - - 『言霊』で編まれた剣。

- - 『言霊』であるが故に、材料などが定まらず、安定しない。

- その実、『剣』でありながら、『剣』ではない一種の神秘。

「神格自体を斬り裂く『剣』の言霊か…あれが草薙君の切り札か。」

護堂がアテナの神格を斬り裂く。

アテナがそれに応戦する。

続くこと、数十合。

さらに苛烈を極める2人の闘い。

辺りの地形は、形を常に変えていく。

護堂とアテナは、ついに切り結んで鏝競り合いになった。

お互い必殺の一撃。

先に動いたのは、護堂だった。

『剣』を操り、鎌ごとアテナを斬り裂いた。

同時にアテナは自らを中心にして、濃密な『死』の言霊が護堂に浴びせた。

2人同時に、地面に崩れ落ちた。

相打ちとなった2人だが、数十秒後にはよろよろと立ちあがる。

両者共に、満身創痍で向かい合う。

アテナは再び鎌で斬りかかった。

対して、護堂は『剣』が使えなくなったのか、逃げ回る。

徐々に、護堂は押されていった。

「さて、『剣』は使い切った。

ここから、どうする？」

案ずる士郎だったが、護堂の目はまだ諦めてなどいかなかった。

逃げ回っていた護堂だが、ふと急にアテナと再び向き合う。

護堂はなにやら確信を得たらしく、一気に攻勢に出てきた。

まだ夜明けとは程遠い時間なのに、東の空から日が上り始める。

闇に閉ざされた世界で、久しぶりに見る光。

……嫌な予感しかない。

いや、まさかねえ。

そんなはずは…ねえ。
予想でしかないけど…射線被ってない？

そんな士郎とは裏腹に、太陽の光は徐々に増していく。
そして、遂に…

「ちょっと!?!?
待った、待ったあ!!」

士郎は全力でその場から、逃げる。
直後、護堂の第三の権能『白馬』が屋上を直撃した。
鉄筋の屋上が、アイスクリームのように溶けだす。

屋上のギリギリまで逃げると、士郎は自らの言霊をはく。

「体は剣で出来ている）I a m t h e b o n e o f m y
s w o r d) ! ! !」

そして迫りくる焔に足に対して、剣の丘から最も信用している盾を
引きずり出す。

「熾天覆う七つの円環ロ・アイアス!!」

七つの花弁が、太陽の焔と拮抗する。

それでも、徐々に焔に押され始めていた。必死に盾を展開しながら、士郎は横目で護堂達を見る。そこには、護堂の投げたクオレ・ディ・レオーネに貫かれ、白き焔に呑み込まれるアテナの姿があった。

東京は一夜にして、大損害を受けた。

地面は隆起し、ビルや首都高は半分以上溶け、庭園は荒地のように何も無い。

しかし、そこには4人分の人影があった。

「草薙君の勝利…か。」

あの後、アテナは大きく力を失いながらも再生を遂げていた。今は、あの3人と1柱の神は今後のことを話しているのだろう。

不利な状況でアテナという強敵を倒した護堂の実力は本物だろう。信用できると、士郎も概ね納得していた。

それでも士郎は少し言いたくなる。

「それにしても、もう少し周囲のことを考えような…。」

…でも、まあ、あいつらは無事そうだなによりだ。」

アテナは、護堂に説得されたのか、姿を消していた。荒れ地の中、いつまでも騒いでいる3人を、土郎は一人眺めていた。

東京を舞台にして行われた、神と神殺しの闘いは、草薙護堂の勝利で終わった。

まつろわぬアテナは、再戦を誓いながら、姿を消す。慌しかった一日は、ようやく終わりを迎えようとしていた。

Episode 1 - 3 決着（後書き）

時間がかかった割には微妙な感じですかね。

文才が無いから、纏めるのが大変です。

今後は、週一を目指して頑張ります。

また、何かありましたら、感想とかでよろしくお願いします。

∴ 他人のSSを読んできると、勝手に自分なりのストーリーを作って、自己満足している、自分がいる。

要は暇なんですね（笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9854r/>

カンピオーネ！～錬鉄の神殺し～

2011年10月8日19時43分発行